
リアルジャスティス

楽天家masa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルジャステイス

【Nコード】

N5801C

【作者名】

楽天家masa

【あらすじ】

カインとガルフの数奇な運命をたどるファンタジー……なのかな？
笑いあり涙あり（予定）のストーリーです。

第一章

この物語は七年前より始まる。

朝の光がカーテンから差し込んでくる。

「んー……」

少年はまぶしそうに布団にもぐりこんだ。少年の名はカイン。シヤインテラス国の英雄であり国王でもあるカダデイルの息子だ。

「王子。朝ですぞ！ 起きてくだされ！」

いかにもじいやという感じの老紳士がカーテンを開け部屋に光を取り入れた。

「あと五分くらいいいじゃないか」

「ダメですじゃ！ 今日王子の大事な十年祭ですぞ？」

そうだった。今日はこの国の一大イベント。十年前に革命が起き、同時にカインが生まれた記念日として執り行われる十年祭があった。

「ふあああ……僕はそんなの別にいいんだけどなあ」

「そんなことでは立派な王になれませんか？」

「王ねえ……」

正直あまりピンとこなかった。五年ほど前からシャインテラス国は隣のルワーノ国と戦争状態なのだ。そのため、父親は国王だが英雄でもあるため常に戦場に出て行って帰ってくるなどなかった。め、面識がなかった。

「みんな父さんはすごいって言うけれど、写真でしか見たことないし話したこともないからよくわかんないや」

「カイン様のお父上のカダデイル様は十年前に腐敗しきっていたシャインテラス国を自ら先頭に立ちこの国の危機を救ったお人なのじゃ……」

十年前の独立革命。この国の中で最も大きな出来事として語り継がれている。当時の国王カムールは悪政の限りを尽くしていた。そんな時立ち上がったのが王国軍第十三部隊隊長のカダデイルであった。その時は誰もが革命軍の圧倒的不利のため残りの部隊にすぐに制圧されるだろうと確信していたが、カダデイルの強さ、そして人望により次々と仲間を増やしついには革命を成したのだ。当然この国の教科書にも載っている。

「その話は何度も聞いたよじいや」

そう。この話はすでに八十七回目だった。三桁の大会に行くのは時間の問題だろう。

「最近もうろくしてしまいましたのう……ささ、早く着替えてくだされ」

「でも十年祭って具体的にはどんなことするの？」

「簡単に言えばお披露目はーちーみたいな物ですじゃ」

「この戦争時にそんなことしていいのかなあ？」

「この戦争時だからこそですじゃ。国民は戦争に疲れてますのじゃ。」

こんな時だからこそ少しでも明るい話題がみんなほしいのですじゃ」
「わかったよ。それでみんな元気になるならそれでいいか」

なぜか少しうれしい気分になった僕は正装に着替えて部屋を出た。

「カイン様。十歳の誕生日おめでとうございます」

部屋を出てすぐのところにピシツとしたスーツを着た男性が立っていた。

「ありがとうバイス」

彼は僕の教育係で勉強から武術すべてを教えてくれている。元はシャインテラス随一の腕前の戦士で、二つ名があるみたいけど……忘れちゃった。

僕は大きな部屋に入った。いわゆる大部屋だ。

「カイン様 朝食が終わりましたら早速スピーチになるのでガンガン食べてくださいね」

吐きそうになるくらい山盛りになった食事を前にして元気を振りまく少女がいた。

「そんなに一杯は食べられないよ」

彼女はメイドのメイ。歳は僕より五つほど年上で元気一杯のお姉さんの存在だ。

「そつえばせつかくの十年祭なのにこんな時も父さんは帰ってこないのかい？」

じいやに聞いてみるとじいやは申し訳なさそうに

「それが今国境付近でもとてまずい状況になっているようでして、任務を離れられないのですじゃ」

「そうですカイン様。知つての通りこの国は独立してからまだ十年しか経っていないのです。国王様みずから出陣しなければならぬほど人材不足なのです。有力な人材はそれぞれいつルワーノに襲われるか分からない重要拠点に赴いているため、そこを離れられないのです」

「それくらいは分かるけどさ……」

「まあまあ、カイン様もさびしいんですね？ まだ十歳になったばかりなんですから」

「このじいや！ カイン様のためならどんなことでも！」

「私もですよ。カイン様」

「ありがとう。メイ。じいや。バイス」

この三人にはいつも世話になりっぱなしでこの息苦しい生活の中で確かに信頼できる人たちだ。

「じいやさん頑張りすぎて死なないでくださいね」

「こりやメイ！ 年寄りに向かってなんてことを！じいやはカイン様が死ぬまでは死にませんぞおおお！」

「いや、それは無理でしょう」

ひややかなバイスのつつこみが炸裂。

「ぐう……じいやはショックで死にそうですじゃあ」

どっちだよ！

「ほらほら、カイン様早く朝ごはん食べてくださいな　みんな待
ってますよ」

朝食と格闘すること十五分。やっと食べた僕は考えたスピーチの
練習した後、みんなの待つ広間への階段を上がった。
この階段がカインの歴史の始まりでもあった……。

第二章

俺は悩んでいた。この国はなにかがおかしい。果たして何なのか？俺がおかしいのか？

「くっ……なんで俺がこんなところに……」

少年は暗い地下牢に閉じ込められていた。歳数は十歳くらいだろうか。

「すまないなあ……これも親父さんの命令なのさ」

人のよさそうな看守が俺に向かって言う。

「親父……なぜ……」

本来ならば少年はこんなところには決して閉じ込められるような身分ではない。少年の父親はルワーノ国の国王なのだ。隣のシャインテラス国とは仲が悪い。

「なぜ……か。それはな、お前さんが強いからさ。父親の命さえも危ないほどにな」

少年は七歳ごろから戦闘のセンスの頭角を現してきた。先日行われた武道会に至っては優勝するほどに。国王の息子で十歳にもかかわらず武道会で優勝したことは人々のあいだに瞬く間に広がった。

「武道会で優勝した。つまり出ていない国王を除いてお前さんは一番強い人間になっちまったのさ」

淡々と看守は話を続けた。

「そうなると国民の間で国王と国王の息子、どっちが強いかという話が出かねない。そこで国王は息子であるお前さんを幽閉したのさ」少年の父親はこの国で一番強い人物だ。ルワーノ国は代々国王を決闘で決めてきた。常に一番強い人間が国王でなくてはならないとの思想の元そうなったのだ。つまり現国王キングルドに唯一勝てるかもしれない可能性がある人物が息子のガルフなのだ。

「お前さんには正直同情するよ。まだ十歳なのに実の父親からこんな扱い受けちゃあなあ」

「ここから逃がしてくれ……」

「すまない……そんなことができる様な国じゃないのはわかってるだろう？」

今この国は父親のキングルドによって独裁支配体制に入っている。そんなことをすればどちらもタダではすまないだろう。

「なぜだ……親父……俺は親父に少しでも近づきたくて猛特訓したのに……」

「この国はどうなっちまうのかなあ？」

「さあ……お前さんの親父に聞いてくれ」

その時、奥の階段から誰かが降りてくる音がした。

「気分はどうだ？」

口ひげの立派な巨軀の男が立っていた。その姿をみるやいなや看守はすぐに敬礼をした。

「キングルド様！このような地下牢にどうなされましたか？」

「フン……ガルフの様子を見にきたのさ」

「ここから出せ！親父！」

言い終わった瞬間鼻先に剣が止まっていた。

「俺は国王だ。言葉遣いには気をつけるんだな」

「くっ……」

「俺はまだまだ国王から退くわけにはいかないからな。そのためには今はお前は邪魔なのだ」

緊迫した時間が流れる。ほどなくしてガルフに向けられた剣をおろし、キングルドは厳しい顔をしたまま続けた。

「俺はこれからこの国の勢力を拡大しなければならない。そのためにはまずは隣国のシャインテラスを落とす。密偵の話では一週間後、向こうの革命十周年と王子の十歳の合同記念パーティーがあるらしい。油断しきつているところに奇襲をかけて今の小競り合いの関係を一気に大きな戦争に発展させる」

「親父！そんなことをして何になるんだ！？」

「フン。戦争というのは儲かるのさ。国を動かすというのはお前が想像してる以上に金があるんだ。シャインテラスは十年前に革命が起きたばかりの地盤がしっかりしていない国。勝てる戦争をしかけないでどうする？」

「なんて卑怯な……」

「卑怯？俺にとってはほめ言葉だな。だが忘れるな。そんな俺の血をお前は受け継いでいるのだ」

「それじゃシャインテラスの人々はどうなるんだ！？」

「そんなものは知らん。俺は俺の国を考えていればいいんだ。それがリーダーと言うものさ」

「さて。これ以上お前と話をしている暇はない。奇襲のための準備があるからな」

言い終わるとキングルドは不適な笑みを浮かべた。

「そうだ。ガルフ。お前にプレゼントをやるう。恨みというプレゼントをな」

「看守のお前！」

「は、はい！」

「特別任務だ」

「はい！」

「これから向こう十年間、ガルフを禁固刑にする」

「そんな……それはあんまりでは？」

「看守が口答えするな！罪状は反逆罪だ。下手なことをするとお前もぶちこむぞ！」

ドスの聞いた声で看守を脅すと、ガルフを一瞥して元来た道を帰っていった。

「……看守さん」

「なんだい？」

「この国はどうなってしまうんだろう」

「さあ……ただ、このまま行くと大変なことになる」

「みんなかわいそうだ。この国の人もシャインテラスの人も」

「君はキングルドのように冷徹な人間じゃないみたいだね。どこか温かみがある」

「なんだかわからないけど……ありがとう」

「どういたしまして。なんかこうなっちゃったから自己紹介しておくね」

牢屋越しに看守が手を伸ばしてきた。

「僕の名前はリック。歳は二十三歳だ。よろしく」

「俺はガルフ。十歳だ。」

「はは……知ってるよ。有名人だもの。でも十歳にしては大人びた感じだね」

「この喋り方もこの国で生き残るためには必要だったから……」

そついうと不意にガルフの目に急に涙があふれてきた。

「つらかったんだね。これからはおそらく僕とガルフ君の二人だけの時間がかかり長く続くと思う。できる限り協力するからよろしくね」

「……リックさん……」

少年は初めて人から優しくされたのか、その場で泣き崩れた。

「俺、強くなる！」

「うん。ガルフ君はまだ十歳だ。これからいくらでも強くなれるよ。肉体的にも精神的にもね……」

ここより数年、ガルフとリックだけの時間が地下牢で流れることになる。上の世界がどんなに変わっても二人だけの時間が……。

第三章

広間にファンファーレが鳴り響いた。

「キヤー！カイン様　！」「カイン様バンザイ！」「次期国王バンザイ！」

「うわぁ……凄いね？」

「みんなカイン様のために集まってくれたのです。歓声にお応えになられてはどうですか？」

「そうだねバイス。なんか僕が王子だって実感が少しずつわいてきたよ」

「じいやは嬉しいですぞー！」

「なんかじいやキャラ変わってるね」

「メイもなんだかうれしそうだね？」

「そりやあもう　カイン様の晴れ舞台ですもの」

カインのために集まったのは百や二百ではない。数万人があつまっているのだ。

「あ、そうだ。スピーチしなきゃ」

「カイン様。原稿です」

「ありがとバイス」

カインがマイクの前に立つと徐々に歓声が静かになっていった。

「えー……今日は独立達成、そして僕の十歳の誕生日も兼ねての十年祭です。今、僕たちはルワーノ国と戦争状態にあります。ですが、今のところ国境の小競り合いで済んでいます。それも、父である力ダディールや、革命の立役者である四騎士のおかげだと思っています

「カイン様！ しつかりしてください！　じいやとメイが逃げ道を確保してくれています！」

「でも……でも……みんなが……」

「今は逃げることをお考えください！　もうすぐカダデイル様が駆けつけてくれるはずです！」

次々と国民が殺される光景にカインは絶望した。

「くっ！　失礼します！　カイン様！」

バイスは無理矢理カインを抱き上げその場を去ろうとした。次の瞬間、巨軀の男が立ちふさがった。

「フン。物々しい警護だな。ひょっとしてそいつがシャインテラスの王子か？」

バイスは躊躇なくその男に護身用のナイフで切りかかった。しかし、簡単にはじかれる。

「ほう。なかなかいい腕をしてるな貴様。となるとそいつが王子で間違いないな」

「そこをどけ！　キングルド！　王子に手は出させない！」

「邪魔だ！　この俺に勝とうなぞ百年早いわあ！」

次の瞬間バイスはキングルドの一撃に吹き飛ばされた。

「他愛のない。俺こそ最強。すべての者は俺に屈するのだ」

バイスは全身から血を流しぐったりしている。

「あ……あ……」

おびえるカインに目を向け、キングルドは剣を振り上げた。

「あのカダデイルの息子に生まれたことをうらむんだな」

「あ……うわあああああああああああ」

そこでカインの記憶は途切れた。

第四章

シャインテラス国のある森。木漏れ日が青年の顔を照らし目をさました。

「ううん……またあの時の夢か……」

すっ……と水を差し出された。

「起きましたか？カイン様」

「ありがとう。メイ」

「またあの夢を見たのですか？」

そう心配そうに聞いてくるのは左目に眼帯をしたバイスだった。あの時全身大怪我を負ったが奇跡に一命を取り留めた。しかし、左目を完全失明してしまった。

「ああ……もうあれから七年も経つのにな……」

そう。あの惨劇の日から七年の月日が経っていた。カインはあれから後のことを思い返していた。

「もうすぐお昼ご飯ができますよ」

メイはあの時なんとか敵の目をかいくぐり生き延びていた。七年経った今でも周りに元気を与えてくれる元気娘だ。周りと言っても俺を含めて四人だけだ……。

「そうですね。そろそろお昼にしましょう。その後は今日も特訓で

すよ？」

バイスは今でも武術を教えてくれている。あのとき俺に皆を救える力があればこんなことにはならなかったからだ。とはいえ当時十歳だった俺に何が出来るわけでもないのだが・・・。

「カイン様ー！ うまそうな魚が取れましたぞー！」

そう叫びながら一人の老人がカインに走ってきていた。そう、じいやだ。今でもしぶとく生きている。意外というかやっぱりいうか……。

「さっすがじいやさん やるう さっそく料理しますねー……あれ？」

メイはじいやが釣ってきた魚を見ると表情が曇る。

「じいやさん……これ……毒があって食べられない魚……もしやカイン様暗殺計画！？」

「な……なんじゃとー！ わしが二時間も粘って釣ったのに……だがかーし！ こんなこともあるつかとキノコもとってきたのじゃー！」

どんなことを想像してたのか分からないけどじいやはキノコをメイに差し出した。

「こ……これは！ じいや！ やっぱり毒キノコじゃないですか！」

まあお約束というやつだ。

「じいやは最初から当てにはしていませんでしたが……」

バイスは冷ややかにじいやをいじめている。いつもの光景だ。

「なんじゃとー！ バイス！ おぬしは何もしとらんではないか！」
「失礼な！ ちゃんと森で薪を拾ってきてましたよ！」

バイスの後ろには薪が山のようになっている。あんなにいるのだろうか？

「まあ二人とも喧嘩しないで。ほら、ご飯できたみたいだよ？」
「喧嘩するなら二人ともあげませんよお？」

メイの一言で穏便にお昼ご飯タイムとなった。なぜこのようなサバイバル生活をしているかというと、あの時ルワーノの奇襲で大打撃を受けてシャインテラス国がルワーノ国の支配下に落ちた。当然王族であるカインは処刑されるので城の人達に手伝ってもらい逃げ出したのである。しかしシャインテラス国はすでに全てルワーノ国に支配されているため身分を隠しこのような放浪の旅をしているのだ。

「そつえば何であの時簡単に攻め入られたんだろう？」

ふとした疑問をバイスにぶつけてみた。

「信じたくはありませんが、おそらく国境を守っていた四騎士のうちの誰かがルワーノ国と内通していたのでしょう……」

「そっか……父さんはどうしたのかな？ 俺と同じように逃げられたかな？」

「どうでしょう……生きていても私たちと同じように身分を隠して

いるので探すのは困難でしょう……」

そこで会話はとまってしまった。メイとじいやは心配そうにカインを見ていた。

「そうじゃ！ この辺りにロブンテロという温泉を売りにしている町があつたはずじゃ！ 気分転換にそこにいつてみてはどうかの？」

「そうですね たまにはゆっくりするのもいいかも」

「うん。そうしよつか……いいよね？ バイス」

「ええ。カイン様が行くところがワタクシの行くところですから」

満場一致で温泉でゆっくりしようということになった。

「それじゃ飯を食ったらいくとするかのー」

「じいやさん覗かないでくださいね？」

「……………するはずがなからう？」

その間が気になる。

「大丈夫ですよ。私が見張ってますから」

「カイン様あ。このご老体を皆がいじめるのじゃあ……………」

「はは…………ま、まあとりあえずその町に行ってみようか」

「お……………」

第五章

階段を下りる音がした後扉が開く音、そして鍵をかける音がする。

「またルワーノが勝ったみたいだよ」

「そうか……親父はどこまでやれば気が済むんだろうな」

「きつと全てを手に入れるまでじゃないかな？ ガルフ」

そう言つとリックは椅子に腰をおろした。

「シャインテラスを奪ってから七年。いまだに反乱軍との戦いは続いてるみたいだね」

「どっちも決め手を欠いてるんだろうな。リックはどう思う？」

「まあこのままだと近いうちにキングルドが一斉攻撃に移るんじゃないかな？」

「どっちにしても俺らには関係のないことか」

ため息混じりにガルフがつぶやく。

「ああ、七年もこの地下牢に閉じ込められてる僕らにはね」

ガルフが地下牢に閉じ込められてからすでに七年が過ぎていた。地上ではキングルドがシャインテラスを落としたそうさ。しかしルワーノ国民の暮らしが良くなったかというところでもなかった。そのせいでルワーノ国、元シャインテラス国両方から反乱が起こってるらしい。しかし圧倒的な軍事力を誇るガルフの父親、キングルドが今のところ制圧に成功している。両反乱軍にちゃんとしたリーダーがいらないのが原因らしい。もっともリーダーがいたとしてもキングルドの圧倒的軍事力の前に成す術はなさそうだが。

「リック。今日も何か面白い話をしてよ?」

「そうだなあ……じゃあ今日は遠く西の国の神秘の力の話をしようか」

「神秘の力?」

「ああ。僕の生まれ故郷の西の国には神の使いと呼ばれる人達がいるんだ」

「どんな力が使えるんだ?」

「そうだね……例えば素手で鋼鉄を引き裂いたり、ものすごく早く走ったり、数十メートルジャンプしたりしてたね。まあ僕が小さいころの話だけどね」

「リックはできないの?」

「僕は出来ないよ。あこがれはしたけどね」

「そんなことが出来たらこんな国の看守なんてやってないか」

ガルフは残念そうに言った。

「まあいつか故郷に帰ったら教えてもらうことにするさ」

「俺もリックの故郷に行ってみたいな」

「三年後の話になりそうだね」

「三年後に生まれたらいいがな……あの親父のことだから忘れてるかもしれないぞ」

「ははは……ありそうでこわいなあ」

キングルドがリックとガルフに言った命令は十年。もっとも、二人が地下牢を出る日は二人の予想に反してすぐそこまで来ていた。

第六章

カポーーーーーン。

「ふう……いい湯ですじゃ……」

「ほんとですねえ……ずっと浸かっていたい気分ですね」

「じいやの腰痛に効くかな？」

「ボケにも効くといいですね」

「なんじゃとお！ わしはまだボケとらんぞお！」

「おや。失礼。もうてつきり手遅れかと……」

「ふんぬーーーーー！ あっ……血圧が……」

「じいや！ しっかりー！ 死んじゃダメだー！」

「カイン様……わしの遺産はタンスの上から三番目の引き出しにしまつてありますじゃ」

「ほう……大事にもらっておきましょう」

「バイス！ おぬしにはやらん！」

「でもじいや……旅の途中なんだからタンスなんてあるわけないよ？」

カインは当然の疑問をぶつけた。

「はっ！ しまった！ うっかりですじゃ」

「やっぱりボケが始まってますね……」

そこからバイスとじいやの壮絶な戦いが始まるのだが割愛しよう。ここは温泉町のメイトール。その温泉の効能と周りのすばらしい景色のため観光の名所となっている。そのため元シャインテラス領の町だが、あまりルワーノの手が入っていない数少ない町だ。おかげでカイン達もあまり怪しまれずに町に入ってこられたのだ。

「もう……もう少し静かに入っていたいなあ……」

そうつぶやいたのはメイだ。当然女風呂の方に入っている。七年前は十三歳だったためほぼ筒型だった体系も二十歳になった今はしっかり出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる。ないすばでーと言っやつだ。

「それにしてもこの景色はすごいなあ……きてよかったかも」

メイの目の前には壮大な山並みが顔を並べていた。当然男風呂の方からでも見えるのだが、あの三人の目にはあまり入っていないだろう……戦いに夢中で。

「あれ？隣が静かになっ たわ？」

男風呂では壮絶な戦いが終わった。じいやとバイスのびて風呂に浮かんでいた。引き分けだった。迷惑なことこの上なかった。

「凄いなあ……じいやはまだまだ現役でいけるんじゃないだろうか？」

カインの感想もこもっともだ。ところ変わって女風呂。

「どうもこんにちは」

メイに負けず劣らずの美人が挨拶をしながら入ってきた。メイをかわいいとするならこの女性はきれいといったところか。

「こんにちは　ここいいところですね」

「ええ。ここは初めて？」

「旅の途中でたまたま寄ったんです」

「そう……それならなるべくこの町から離れた方がいいわ」

「え？ どうして？ こんなにいいところなのに……ルワーノの侵略もつけてないし……」

「だからこそよ……ここはもうすぐ……」

女性が言いかけたところで、メイは山の方から何か光る物を見た。そこにはライフルを構えた兵士が見えた。女性を狙っているようだった。

「危ない！」

メイは女性に飛びかかった。その瞬間銃声が響いた。女性がいた後ろに着弾した。メイが飛びかからなければ間違いなく女性を貫通していただろう。

「くっ！ 奴らね！」

女性はそう言うのと脇に置いてあったタオルから拳銃を取り出し山に向けた。しかしもうそこにはスナイパーはいなかった。

「大丈夫ですか？」

「ええ。ありがとう。助かったわ」

「それにしても誰だったんだろう？ もしかして私が狙われたのかしら？」

「いいえ。確実に私を狙ってたわ。えっと……」

「メイです」

「メイさんね。改めてお礼を言っわ」

「いえいえ……それより……」

ザッパアアアアアン。

「どうしたのじゃメイ！」

「なにやら銃声だったようですが……おや？別の女性もいらしたんですね」

「いや……俺は止めたんだよ？でもじいやとバイスが……」

そう。じいやとバイスとカインが上から落ちてきたのだ。

「キ……」

「木？」

「気？」

「奇？」

三人そろってハテナが浮かんだ。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

三人はメイの手によってお星様になりましたとさ。めでたしめでたし。

「メイさん。今の人達は？」

「あ、気にしないでください。ちょっとした知り合いですから……」

どうやら仲間と言つのが恥ずかしかったらしい。

「そう。私の名前はリリイ」

気にしない性格らしい。

「メイさん。お礼をしたいのだけど……あなた、ルワーノをどう思う?。」

お礼とルワーノが何の関係があるのかメイにはさっぱり分からなかったが正直に応えることにした。

「はつきり言って大嫌いです。私達の今の生活もあいつらの……いや、何でもないです」

「そう……それなら大丈夫ね。是非お礼がしたいから明日の午前十時にこの町のレヴオという喫茶店に来てくれない? ご馳走するわ」
「そんな悪いですよ……まあでも甘えちゃってもいいかな?」

「ええ。さっきの三人もお仲間なんですよ? 一緒に来てかまわないわ」

「あちゃ……ばれてましたかあ」

「だってあの三人あなたの名前知ってたもの」

「それならお言葉に甘えて四人で行きます」

「それじゃ私は少しやらないといけないことができたから先に上がるわね」

「はい また明日ー」

リリイは少し険しい表情で女風呂を後にした。

「はあ……平和だわ……」

意外とメイはのんびり屋なのかもしれない。この頃お星様になった三人はまた女風呂を覗こうと頑張っていたのだが結果が見えていたのでここでは割愛させてもらう。それから数時間後とあるホテルの一室にて。

「……………」

「もしわけありません」

「……………」

「もう二度と覗かないと誓いますのでどうか機嫌をなおしてください」

三人が平身低頭で謝っている相手は言うまでもなくメイだ。時刻は午後九時。

「……………で？」

そこには鬼の形相のメイが立っていた。カイン、バイス、じいやの三人が土下座している。あの後再三お風呂を覗こうとしていたのを再三メイに見つかったのだ。当然の結果である。

「まったく……カイン様もこんな二人の影響受けちゃってどうするんですか？」

「返す言葉もございません」

「じいやさんもいい歳なんだからいい加減にしてくださいね？」

「キモに銘じておきますじゃ」

「バイスさんもカイン様の教育係を名乗るならちゃんと教育してください！」

「いや……これも立派な……」

言いかけたところでバイスは何もいえなくなった。メイの顔が鬼から般若に代わったからだ。これ以上言うと命がないことを悟った。

「もういいわ。そのかわり三人とも明日は私の言うことを聞いてもらいますからね」

「ありがとうございます！」

三人はハモって言った。

「よろしい。んじゃ明日十時にレヴオっていう喫茶店に全員で行くわよ」

「何かあるの？」

「お風呂で知り合った女性を助けたらお礼がしたいって言われたから皆でいくの」

「その人は信用できるのですか？」

バイスは不振に思いメイに聞いてみた。

「まあ私達の正体がばれてるってわけでもないから大丈夫だと思えますよ？」

「それならいいんですが……」

「まあ大丈夫じゃろ……わしらは死んだことになっておるしもう」

そう。あの騒動の中カイン達四人は行方不明という扱いになっていた。それから何年経っても見つからないということで二年ほど前にルワーノ国政府は行方不明から死亡に切り替えていた。ちなみにあの時の行方不明者は三万人と言われている。

「でもお風呂でこの町を離れた方がいいって言ってたのよね」

「ほう……そのリリイという方が言ってたのですか？メイ」

「ええ。言いかけたところでスナイパーに気がついて結局何のことかわからなかったけど……」

「何か恐ろしいことでも起こるんかのう？　喫茶店にいかずにそのまま出た方がいいんじゃないんかの？」

「まあでもせっかくお礼してくれるって言うてるんだし行かなきゃ失礼になっちゃいますよ？」

「そうだよじいや。それにいざとなったら俺もバイスもいるんだし。七年前よりは強くなったからちよつとやそつとの騒動は大丈夫さ」
「まあでも気をつけておいたほうがよさそうですね……明日はカイ

ン様を必ずお守りします」

「ありがとバイス。さて寝ようか」

「そうですねー。ほら、早く皆さん出て行ってください。いつまでレディの部屋にいるつもりですか？」

そうメイに急かされ三人は部屋を出た。表情はしづしづと言った所だったが……。

第七章

ゴゴゴ……という地響きと時折砲撃のような轟音がそこに鳴り響いていた。

「何が起こってるんだ？リック分かるか？」

「ちょっと分からないなあ……上に行つて様子を見てくるよ」

リックは地下牢を出て地上の様子を見にあがつた。リックの見た光景はルワーノ国旗が燃やされ、ルワーノ兵士が何人も倒れている現場だった。

「こ……これは……」

「おい！そこのお前！何してる！早く逃げろ！反乱軍が押し寄せてきたぞ！」

ルワーノ兵と思われる男がリックに叫んでいる。しかしどこから飛んできた銃弾によりその兵士はそこで命尽きた。

「これはまずいですね……」

遠くの方で反乱軍が大勢で押し寄せてきているのが分かる。大急ぎでリックは地下牢に戻り入り口付近にあつた鍵を持ってガルフの元に走った。

「リック。何が起こつたんだ？」

「まずいぞガルフ。反乱軍が攻めてきてる」

「本当か？ここは腐ってもキングルドの治めるルワーノ本国だぞ？」

「實際来てるんだから嘘も本当もないさ。もつともキングルドは今
は元シャインテラス領に視察中みたいだがな……」

「だろうな……じゃないところも簡単に攻められるはずがないか……」

こんなことをされてもガルフは父親の強さだけは信じているよう
だ。

「今鍵を開けるから一緒に逃げるぞガルフ」

「そうだな……こんな騒動でもなければ逃げられそうにもないしな
……」

七年ぶりに鍵穴に刺さった鍵はなかなか開かなかった。

「さび付いてやがる！」

二分ほど奮闘してリックは牢屋の鍵を開けた。

「開いた！ 逃げようガルフ！」

「まさかキングルドの言った期限より早く牢屋を出ることが出来る
とはな……」

この国でのキングルドの発言力は絶対なのだ。

二人は地上に上がるための階段をひたすら上がった。そこで二人が
見たものはすでに焼け野原となっている城と周りを取り囲む兵士た
ちだった。

「俺たちは反乱軍だ！お前たちは何者だ！」

隊長らしき男が話しかけてきた。リックは考えた……。ここで嘘
をついてもすぐにばれて殺されるだけだと。それならいっそ……。
そう考えている間に先にガルフが口を開いた。

「俺はガルフ。この国の第一王位継承者だ。もったもそんな権限はないがな……」

「ガルフ？ 第一王位継承者？」

男は少し考え込んでいた。その時ガルフ達が出てきた所を調べていた兵士が帰ってきた。

「隊長！ この下は牢屋になっています！」

「たしかガルフ王子は七年前から行方不明のはずだが……なぜこんなところに……」

「それはこのリックがお答えしましょう。答えは簡単。当時十歳だったガルフが武道会で優勝したために父親であるキングルドがその才能に恐れてずっと幽閉されていたのです」

「ふん……嘘か本当かわからないからその二人を動けないように縛ってグール様のところまで連れて行け！」

すぐにガルフとリックは動けないように縛られた。そのまま王の間まで連れてこられた。もったもここは反乱軍に落とされてたのでそこにいるのはキングルドではなくグールと言う反乱軍のリーダーだった。

「グール様！ 地下牢にてルワーノ国のガルフ王子と言い張る二人組を捉えてまいりました！」

「何？ ガルフ王子だと？ 馬鹿を言え。あいつは七年も前から行方不明ではないか」

「それが、幽閉されていたとのことですよ」

「まあいい。連れてこい」

ガルフとリックがグールの前まで連れてこられた。後ろには槍を

持った兵士が二人の首元に槍を突きつけていた。いつでも殺せるようにだろう。

「二人いるのか……七年前に十歳だったから……おそらくお前か？」

グールはガルフに目を向け聞いてきた。

「ああ……俺がガルフだ。七年前に親父に牢屋に入れられた」

「キングルドならやりかねんが……証拠はあるのか？」

「そんなもんはねえよ……あるにはあったが幽閉されるときに取り上げられた」

「じゃあ信用できんな」

それまで黙って聞いていたリックが何かを思い出したように口を開いた。

「……ある……あるぞ。僕の右ポケットを調べてくれ」

そこから出てきたものは、ルワーノ王家しか持つことの出来ない紋章が入ったペンダントだった。

「ほう……これは間違いないな。本物のガルフ王子か……」

「最初からそういつてるだろ」

少しグールは考えて何かを思いついたようにニヤリと笑った。

「ガルフ王子。キングルドが憎くないか？」

「憎いに決まってるさ。なぜそんなことを聞く？」

「俺たちは今キングルドのやり方に反感を持って反乱軍を起こし俺がリーダーをやっている」

「だからなんだ？」

「実はガルフ王子に頼みがあるんだが……これは本物の王子であるあなたにしか出来ないのですよ」

なぜかグールは急にガルフに対して敬語になった。

「頼み？」

「今の反乱軍は数はそれなりにいるのにいつもキングルド軍に負けていた。なぜか？ それは圧倒的なカリスマ性を持ったリーダーがいなかったからなんですよ」

「なるほど。それでキングルドの息子である俺に反乱軍のリーダーになって民衆の力を得たいということか」

「その通りですよ。しかしあなたは何もしなくてもかまいません。あなたの存在だけで民衆はついてきますので」

「キングルドの息子というだけで民衆は離れて行きそうなものだけだな」

「そんなことはありませんよ。何故かあなたが幽閉されている間に民衆の中にはガルフ王子が王様になればいいという声一杯ありましたからね」

「俺がリーダーになればルワーノ国民は幸せになるのか？」

「それはもう。キングルドさえ倒せば反乱軍の役目は終わり。あとはガルフ王子が王位についてもらえば……」

「少し考えたい。一日くれ。あと、俺とリックの拘束は解いてもらう」

「わかりました。おい！ 二人に部屋を用意しろ！ あと二人の拘束を解け」

ガルフとリックは城の中の部屋に入った。というよりも閉じ込められたと言う方が正しいのだが……。

「リック。どう思う?」

「はつきり言ってもものすごく怪しいなあ」

「やっぱりそう思うよな」

「多分ガルフをリーダーにしてこの国の実際の支配権が欲しいだけの様な気もするけど……ガルフはどうしたいの?」

「俺は……」

ガルフは黙り込んだ。リックも無理に聞こうとせずにガルフが口を開くのを待った。

「……俺はたとえグルルに利用されているとわかっていても、父親と対決することになっても、この争いを止めたいと思う」

リックはにっこりと笑った。

「やっぱりガルフはキングルドとは違うね。まあ七年も一緒にいてそんなことはとくに分かってたけどね」

「絶対にルワーノ国民を幸せにしてみせる……」

「きつとそれはかなり険しい道になるよ……ガルフ」

翌日、再び王室にガルフとリックは向かった。

「答えは出ましたか?」

「ああ……そのリーダーの役目。受けさせてもらおう」

「おお、その言葉を待ってましたよ」

「ただし! いくつか条件がある。それを飲んでもらわなければリーダーにはならない」

「その条件とは?」

「まず、常に俺の近くにリックはいてもらう。それからリーダーになる以上は俺が反乱軍を決定する。それでいいな?」

「はい。しかし、一つよろしいですか？ガルフ王子」

「なんだ？」

「このグール。これでも一応元リーダーなので反乱軍の軍隊の指揮は私にとらせてもらいます」

「…………グール。お前の目的はあくまでキングルドを倒すことなんだな？」

「ええそれはもう。それさえ果たせば他に何も望みませんよ」

「わかった。指揮の腕は確かなようだから任せたぞ」

どこかに不安を覚えながらもガルフはグールの提案をのんだ。これもルワーノの平和のためだと自分に言い聞かしながら。

この反乱軍の新リーダーにガルフ王子がなったと言う知らせはすぐにルワーノ全体に広がった。その時元シャインテラス領にいたキングルドにも……。

「反乱軍の新リーダーにガルフだと？ やってくれるわ反乱軍。だがその程度でこのキングルドを倒せると思うなよ！」

第八章

カランコロン。

「四人ともお待たせ」

リリイが喫茶レヴオに入ってきた。待たせたと云っても五分程度だ。

「おお……お風呂で見た妖精さんは本物だったんじゃないのう」

「じいや。妖精って何ですか？ お風呂にいた女性ではないですか。やはりもうろくしたくないですねえ」

「なんじゃとお！」

「ほら、二人ともここまできて喧嘩しないで。メイもめてよお」
「知りません」

どうやらメイは無視を決め込んだようだ。

「面白い人達ねメイさん」

「子供ばかりで困りますわオホホホホ」

「キャラ違いますよ？」

次の瞬間バイスは口にガムテープをされた。冗談抜きで。

「そういえばどうしてリリイさんは狙われていたんですか？」

「……それは聞かないほうがいいわ」

「ムガムガムガムガ」

「そうじゃのう……気になるわい」

「でもこれはあなたたちの為に言ってるのよ」

「私達のため？」

「ムガムガ？」

「だってあなたたちはルワーノから追われている身でしょ？」

「どうしてそのことを？」

「俺達のこと知ってるのか？」

「ムガムガ！」

「昔手配書で見たことがあるわ……もっとも手配されていたのは二人だけみたいだったけど……」

そう……手配されていたのは元シャインテラス国王子カイン。その側近のバイス。この二人なのだ。

「私が狙われたのはあなたたちに決して得ではない情報だから言わないのよ」

「ムガムガ……」

「だー！ー！ー！ムガムガ言ってんじゃないわよ！このムガムガ星人！」

ムガムガ星人はここでお役ゴメンになった。変わりにガムテープですっかりたらこ唇になったバイスがそこに立ち尽くした。

「ゴホン……私達に関係のあることならなおさら聞かないといけませんね」

「そーよそーよ」

「後悔するわよ？」

「別にいいよ……そろそろこの生活から抜け出したいし……」

「わしたちに話してみんかの？」

「………わかったわ……」

リリイはおもむろにコーヒーをすすり、話しはじめた。

「今あなたたちは死んだことになってるはずだけど、実際ルワーノ上層部ではいまだに探しているはずよ……」

「なんだって！ すっかり油断してた！」

「でしょうね……表向きは完全に忘れ去られた事にされているからね……」

「どうしてあなたがそれを知ってるの？」

「それが本題……あたしはシャインテラス解放軍のリーダーのリライよ……」

「話には聞いたことがありますね……なんでもキングルドの最大抵抗だとか……」

「ええ……だから相手の情報もそれなりに入ってくるわ……」

「その最大抵抗力がどうしてこんな温泉街に？」

「この町が観光地でルワーノの目が甘いからよ。他にも各地に仲間がいるわ。でもどうやらそれも昨日のスナイパーがいたところを見るとおとりだったようね……」

「だから早くここを離れろって言ったんですね」

「それにあなたたちはあまり解放軍にかかわらない方が……」

リライが言いかけたときに一人の男が入ってきた。

「リライさん！ 大変です！ ルワーノ軍が攻めてきました！」

「なんですって！ 第一種戦闘態勢に入りなさい！」

「わかりました！」

リライが号令を出したとたん店にいた店員や客が一斉に動き出した。どうやら全員解放軍のメンバーだったらしい。

「あなたたちも聞いたでしょ？ 早くこの町を出なさい」

「俺達も手伝う！」

「そうじゃそうじゃ！」

「メイも手伝います」

「そうですね……見逃せませんね……」

「……やっぱり今はダメ……気持ちはいれしいけど……」

「どうしてだよ！ 町の人達が心配じゃないのか？」

「心配に決まってるじゃない！」

「……ゴメン」

「でも大丈夫よ……今あなたたちが解放軍に現れたと知られたらおそらく一気にキングルドにつぶされる。まだ小さい組織だとキングルドに思わせておかないとダメなの……」

「……でもやっぱり手伝いたい！」

「カイン様……」

じいやとメイとバイスは目に涙を溜めていた。

「わかったわ……でも組織に入ることは絶対に許しません。あくまで義勇軍としてこの町を守ってもらえますか？」

「わかった。ありがとうリリイ」

「やはりあのカダデイル様の息子なのですね……底知れない力を感じます」

「……父さん……リリイ、何をすればいい？」

「そうですね……あなたたちがこの町にとどまるのは危険なのでこの町の西門に向けて進んでください。西側は一番戦力の薄い地域なのであなたたちの力に期待していますよ」

「わかった。西だね」

「ええ。そのままこの町から出てください。それではまた会える日を楽しみにしています」

「よし！ 三人とも！ 行くぞ！」

「わかりました。カイン様」

「このオイボレも頑張りますぞ！」

「はい リリイさん、またいずれ会いましょう」
「それでは解散！」

全員店の外に飛び出した。リリイは真っ先に大通りへと消えていった。

「じいや！ そっちは北！ こっちだよ！」

カインに引きずられるじいや。どうやら典型的なボケが好きらしい。

「メイ！ 遅れるなよ！」

メイの腕を引っ張っているバイス。

「ちょっとバイスさん……」

訂正しよう。メイの腕を引っ張っているつもりで胸をもんでいるバイス。

「うむ！ すまん！ よし！ いくぞ！」
「言うことはそれだけかー！」

さらに訂正。メイの腕を引っ張っているつもりで胸をもんでいたバイスをひっぱたいたメイら一行は西に向けて走った。

「みんな気をつけろ！ 敵だ！」
「ここは私に任せてもらいましょう」

バイスはスラリとナイフを抜いた。

「うおおおおお」

ルワーノ兵士は力任せに剣を振り下ろしてきた。バイスはナイフで剣を受け流し強烈な当身を繰り出した。

「ぐああああ」

ルワーノ兵士は二メートルほど吹き飛ぶと気を失った。

「敵兵は私が露払いをします。後ろについて来てください」

さすがは元シャインテラス随一の戦士。強さは並ではない。

「こういうときは頼りになりますね」

その時だった。敵に挟み撃ちにされた。前には三人。後ろには二人。迷わずバイスは三人を。カインは二人を相手にした。

「二人ともがんばるんじゃぞー！」

果たしてじいやの応援はいるのかどうかは置いて、バイスはナイフを一人に投げつけた。ルワーノ兵士はナイフを剣ではじき返し、バイスに斬りかかってきた。その一撃を鼻先で避け、相手の手首をつかみもう一人に投げ飛ばした。しかし残りの一人がその隙に剣を横なぎにしてきた。その剣がバイスの首を捕らえたと思われた直後、バイスはさらにナイフを取り出しそれを受けた。

「さすがに三人は少しきついですね……」

しかしその三人がバイスに攻撃を仕掛けてくることがなくなった。

「腕なまったんじゃないんですか？ バイスさん」

一瞬のうちにメイが三人の首筋に手刀を繰り出していた。

「相変わらずですね」

やはりメイも元々王子の側近ということである程度の武術は会得しているようだ。じいやは別として……。 (本当はわしも強かったんじゃないがのう……。 じいや談)

一方カインの方も二人を相手に決して引けをとってなかった。カインは基本的にはバイスと同じナイフと体術で戦うタイプだった。しかし、その才能は底知れぬものがあつた。

「ほらほら、そんな遅い剣筋じゃ俺は切れないぜ？」

二人の波状攻撃を難なくかわしていた。一瞬見せた攻撃の緩みをつき、二人を倒した。かなり目のいい人でないと見えないほどに技は洗練されていた。この一瞬の間に敵の手首に手刀をして剣を落とす、そのまま回し蹴りでもう片方を倒し、その上げた足をそのまま踵落として一人目を沈めた。

「おお……カイン王子ご立派になられて……」

じいやは目に涙を浮かべている。

「ぼんやりしている暇はありませんよ？ 急ぎましょう」

バイスの声で四人はまた走り出した。

「それにしても腕を上げましたねカイン様」

「へへ……そう?」

「私との組み手の時とは比べ物にならないくらいの強さがあります。本番で力を出すタイプなのかもしれないね。やはりカダデイル様の血を継ぐ者というところでしょうか」

「父さんか……今頃何してるんだろうな……」

「きつとどこかで生きてますよ」

「そうじゃそうじゃ!あのカダデイル様を倒せる人間なんてそうそうおらんぞい」

「そうだな……うん!」

徐々に開けた場所に出てきた。そこには次々を解放軍を倒していく一人の兵士がいた。

「ふん……こんなものか解放軍」

もうすでに三十人は倒れている。かなりの強者だろう。その男は大きめのマントをなびかせて大きな剣を振り回し風のように舞っていた。

「やめろ!」

カインとバイスは一直線にその男に向かっていった。男は二人を一瞥するとその大剣を一閃した。

「くう……」

その剣圧でカインとバイスは弾き飛ばされた。すかさずメイとじいやが受け止めた。

「ほう……お前達二人……見たことあるな……特に眼帯の方……」

バイスは背中に冷や汗を感じていた。こいつは強いとバイスの中で警戒音が鳴り響いていた。

「……まさか……シャインテラスの……」

男は何かに気づいたのか懷から二枚の紙を出した。それはカインとバイスの手配書だった。

「フッフ……ハハハハハハハ！こんなところで旋風のバイスと会えるなんてなあ！」

「旋風？」

カインは不思議そうにバイスを見る。

「昔のあだ名ですよ。昔のね……」

「ハハハハハハハ！……ということは隣のヤツは王子だな？」

バイスの冷や汗は止まらない。間違はなく自分よりも強い相手だと悟った。

「俺の名前はジェイク。キングルド様直属の部隊、狼牙の隊長だ！」

「狼牙……なるほど……どうりで強いわけですね……」

「狼牙じゃと！まずいぞバイス！」

「じいやさん知ってるんですか？」

「ああ……ルワーノ国最強の部隊。その隊長となるとおそらくキングルドの次に強いはずじゃ……」

「西門はすぐそこです。私が食い止めますから三人は先に行ってく

ださい。」

「でもバイス！ 一人じゃ危険だ！」

「お願いです……カイン様……おそらく今ジェイクと戦えるのは私だけのようですから……」

相変わらずバイスの顔つきは厳しい。その表情を読み取ってじいやとメイが動いた。

「じいやさん！ 無理やりにもカイン様を連れて行きます！ 協力な」

「わかったのじゃ！ 頼んだぞバイス！」

「じいやより先には死ねませんからね……」

「その言葉嘘にするではないぞ！」

「でも……グウ」

鈍い音を立ててメイがカインを気絶させた。

「ごめんねカイン様……」

「西門に出てから一時間以内に私が戻らない時はずっと西の方にあるハポンという村に行ってください。私の出身地できっと力になってくれるはずです」

「わかりました……絶対に戻ってきてくださいね？」

「ああ……必ず……」

「俺が逃がすとも思っているのか？」

「分かっていますね……私が逃がすんですよ」

バイスはジェイクとの距離を一気に縮めた。カキンという乾いた金属音があたりに響いた。

「いまじゃ！ 逃げるぞい！」

カインとじいやとメイの三人はバイスとジェイクの脇をすり抜けて西門へと去っていった。

「チツ……王子は逃がしちまったか……まあいい……あの旋風のバイスとやれるんだからな……」

ジェイクはにやりとすると力任せにバイスを突き飛ばした。

「その名で呼ばれるのは懐かしいですね……」

「そうだろうな……今から十七年前のシャインテラスの革命で、その武術で吸い込まれては飛ばされる光景に当時のカムール率いる国王軍から『旋風』の呼び名で恐れられていたのがお前だ。その強さはまさに一騎当千だったらしい。当時は一兵士でなかった俺には伝説の存在さ」

「否定はしませんけどね……」

「だがそれも昔の話だ……今のお前に俺を倒すほどの力はないと見た……」

「確かに……あの頃よりも力は落ちたでしょう……しかし、私は今の自分の方が好きです。守る者がいるという強さを手に入れましたからね……」

「ハハハハハ！ 強くなるのにそんなものはいらない！」

「……いきます……」

第九章

大広間にて。

「首尾はいいな？」

「はい。大丈夫でございます」

「俺の計画はこれでまた一歩前に進む……ぬかるなよ」

「はいお任せくださいグール様……」

そういつと男は闇に消えた。それと同時に大広間の扉が開いた。

「グール。戦況はどうなっている？」

「これはこれはガルフ様。それでは説明いたしましょう」

「なにかたくらんでそうだな？」

ガルフと一緒に入ってきたリックがグールに釘をさした。

「リック殿。たくらんでいるとは人聞きの悪い……これでも反乱軍の参謀なんですね……いろいろと策は練っていますよ……いろいろとね」

一瞬怪訝そうにグールを見たが、グールが説明の準備をし始めたので渋々席に着いた。

「さて。ここにルワーノの地図があります」

テーブルの上に大きな地図が開かれた。真ん中の辺りに少しだけ青、国土の右半分が緑、左半分が赤で塗られていた。

「この青の部分が今回我が反乱軍が制した部分、緑の部分がガルフ様がリーダーになったことによって反乱軍に参加した勢力、赤い部分がキングルドの勢力となっています」

「ふむ、戦況は悪くはないんだな？」

「ただ、今回はキングルド不在中での反乱だったため半分しか味方についておりません……がしかし」

グルーは赤い部分を指差した。

「この赤い部分は元シャインテラスの領地まだ手はあります」

「向こうの反ルワーノ勢力を取り込もうというのか？」

「その通りですよリック殿」

「だが上手くいくとは思えないな」

「どうしてだ？」

「いいかいガルフ？　いくら俺達がキングルドに逆らっている勢力だとしても結局はルワーノなんだ。彼らはあくまでシャインテラス国として再建したい連中なんだからキングルドを倒したら次は僕達が敵になる」

「それはそうだな」

「ガルフ様。リック殿。ちゃんと策はありますよ……」

「ほう……どんな策なんだ？」

「俺もリックと同じ意見だ。知りたいね」

「ではご説明しましょう。今彼らには前の私達と同じようにカリスマ性を持ったリーダーがいません。そこでガルフ様に向こうのリーダーと接触してもらい協力を持ちかけるのです」

「なるほど……ガルフのカリスマ性を利用するんだな？」

「その通りですよ。その際には護衛としてリック殿にも付き添ってもらいます……」

「僕はガルフより弱いぞ？」

「ですが今の反乱軍の中ではかなりお強い方なので……念のためと

言うものですよ」

「確かに一人で行くのは危ないな。仮にも今は敵なんだから……」

「わかった。リック、一緒にいこう」

「そうそう、相手のリーダーの名前はリリイ、場所は……」

バアン！

「大変ですグール様！ ロブントロがキングルドの軍勢に攻め込まれました！」

「なんですって？」

「なあグール……もしかしてその場所って……」

「ええ。ロブントロです。しかしキングルドに先を越されたみたいですねえ」

「これは一刻も早くいかなくتهはいけないみたいだな……すぐにでも出発するぞリック」

「はいよガルフ」

「ガルフ様。おそらくこの襲撃で相手は場所を移すでしょう。こちらでも調べておきますがとりあえずロブントロに向かってもらいます」

「わかった。そのリリイってやつ会って話をつけてくればいいんだな？」

「大丈夫。いざとなったら僕が話すから」

「二人とも頼みましたよ……」

グールは地図を片付けると用事があると言って出て行った。

「さてリック。とりあえずロブントロに行ってみようか？」

「ちよつとグールの動きが気になるけど……仕方ないね」

「確かにな……」

「……そうしたら準備をしてくるよ。一時間後に正門で待ち合わせ

しよう」

「分かった」

ガルフとリックはそれぞれ準備の為に自分の部屋に戻った。

「……必ず……平和に……」

ガルフは静かに、そして強くそう思った。

第十章

一時間後。

「バイス戻ってこないな……」

「でもきつと大丈夫ですよカイン様」

「そうじゃな。バイスも何か考えがあるんじやろつ。とりあえずバイスの言っておったハポン村とやらに行ってみるとするか」

「うん……」

カインはあきらかに落ち込んでいた。自分の力の無さを痛感していた。

「強くなったつもりでいた……でもあのジェイクには全然歯がたたなかった……」

「カイン様……大丈夫ですじゃ！ バイスはあれでもかなり強いんじゃないよ……十七年前のシャインテラスの革命の時にはカダデイル様と一緒に中心人物として戦ってたからの」

「……わかった！ ハポン村にいこう！ バイスは絶対追いついてくる！」

まるで自分に言い聞かせるようにカインは二人に言った。

「ハポン村はロブンテロよりさらに西。シャインテラスの最西端にあるのじゃ」

「それならかなり遠いですね……どれくらいかかるんですか？ じいちゃん」

「そうじゃのう……わしの足で一週間といったところかの？」

「それじゃあ私たちで二日ですね」

「わしの足はそんなに遅くないわ！」

「まあ五日ぐらいだろうね」

「うっ……カイン様まで……わしはじいじじゃないぞい！　じいやじゃー！」

「どう違うんですかね？　カイン様わかります？」

「よくわかんないや」

「とにかくいきますぞい！」

「おー！」

三人はシャインテラス最西端の八ポン村に向けて元気よく歩きだした。

……そして一週間後……

「……腹減ったよじいや……」

「私もお腹減りました……」

「わしもひからびそうじゃ……」

元々ひからびてるじゃん！　とツツコミを入れる気力も無い二人。時は昼！　場所は森の中！　半日もあれば森を抜けられると途中で出あった人に言われ、意気揚々と森の中に突き進んだ三人を待ち受けていたのは、数々の罠！　ではなかった。迷ったのだ。相変わらずお約束を繰り返す一行である。

「ここさっきも通ったよ……」

「そうですね……私も見ました……」

「わしの長年の勘がこつちと言っておったんじゃがな……」

半日で出られるといわれる森をさまよって早三日。予定していた食料は全て食べつくしてしまった。はたして三人はここで飢え死に

してしまうのか？

「あははは……メイ……じいや……ステーキが見えるよ……」

半笑いでふらふらと歩くカイン。危ないヤツにしか見えない。

「うふふふ……待つてえ……カイン様あ……」

半笑いでふらふらと追うメイ。危ないヤツにしか見えない。

「二人ともしつかりするんじゃない！」

幻覚を見る二人を必死で連れ戻そうとするじいや。嫌がる二人を無理やり引つ張る姿は危ないヤツにしか見えない。

かくして危ない三人の運命やいかに！

「そこで何をしている！」

そこには狩人姿の男が立っていた。メガネをかけいかにも神経質そうな男だった。

「おお！ 助かった。すまぬが飯を食わせてもらえぬか？」

幻覚を見ていた二人も新しい登場人物に現実に戻っていた。

「天の助け！」

カインは叫んだ！

「天の導き！」

メイも叫んだ！

「ありがとう友よ！」

カインとメイはハモリながら男の手をとった。

「ここは素人が来る森じゃないぞ。何も知らない人間が踏み入れたら確実に出られない」

その狩人が言うにはこの森はある特別な木をたどっていけば簡単に通れるが、それをしなければ複雑な道が行く手をはばみ迷ってしまふとのことだった。

「初耳じゃのう……」

「まあ俺が通ったから助かったようなものだな」

「キャッ」

三人がホッとしたとき、メイが小さな悲鳴をあげた。

「メイどうした？」

カインとじいやがメイを見てみると痙攣を起こして倒れていた。

「さわるな！ 俺が見る！」

狩人がメイに近寄り、神妙な面持ちで体をくまなく見ている。

「……………っ」

狩人がメイの右足首を見た時顔つきが変わった。

「まずいな……」

狩人は自分の服の袖を破きメイの右足首をきつく縛った。

「どうしたんだ？」

「この女の子、猛毒の蛇に足首を咬まれている……急いで俺の村に運ぶぞ」

三人は大急ぎでメイを狩人の住む村まで運んだ。狩人はメイをベツドに寝かせて必死に何かの薬を塗っていた。おそらく血清か何かだろう。

「ふう……とりあえず命に別状はない。だが一日は絶対安静だ」

「ありがとうございます」

「自己紹介がまだだったな……俺はジェス。このスナイ村で狩人をしている」

「スナイ村……いまだにルワーノに対して侵略を許していない村と聞いたが……」

「ああ。ルワーノにしてみればこんな小さな村を落としても無駄ということかもしれないがな」

「俺はカインと言います。俺の世話をしてもらっているじいやと助けてもらったのがメイです」

「じいやじゃ。おぬしなかなかの腕じゃのう」

「これくらい出来ないとの森では生きていけないからな。それはそうとお前達はあそこで何してたんだ？」

「迷ってたんじゃ！ まいったか！」

「じいやは黙ってて」

カインに言われじいやはしおらしくなった。

「ロブンテロからハポンに向かう途中だったんです」

「それならあの森を通るくらいしか道がないな」

「でももう森の抜け方を教えてもらったので大丈夫だと思います」

「そうじゃの。あとはメイの回復を待つて出発するとするかのう」

カーンカーンカーンカーン。

「外が騒がしいな……」

半鐘の音が鳴り響く中、村中が赤みを帯びてきた。

「火事か？ちよつと行つて来る。二人はその子についてやれ」

「わかった」

ジェスは家を出て行つた。

「カイン様。あの男なかなかの身のこなしですぞ……只者ではありますまい」

「そうだな。この村でもかなり頼られているみたいだしな」

その時ジェスが大慌てで家に戻つてきた。

「大変だ！ 誰か攻めてきた！」

「誰か？ ルワーノじゃないのか？」

「違う！見たこと無いシンボルだ！」

「じいや！ メイを頼む！ 俺は外を見てくる」

「カイン様気をつけるんじゃぞ！」

カインとジェスは村の高台まで出てきた。少し遠くに数千の軍勢が見えた。おそらく後十分もしないうちに攻め入るだろう。

「確かに見たことない旗だな……」

軍勢の中から一人の騎馬兵が飛び出して村の入り口までやってきた。

「我々はルワーノ反乱軍グールの部隊だ！我々の躍進のためにこの村には滅んでもらう！」

「ルワーノ反乱軍……？　そういえばルワーノ本国が何者かの手によって落ちたとリリイから報告があったな……」

「リリイを知ってるのか？」

「お前もリリイを知ってるのか……ならば話が早いな」

ジェスは羽織っていたマントを脱ぐと腕章を見せた。

「俺はこのスナイ村にいるシャインテラス解放軍リーダーのジェスだ。もつともスナイ村全体が解放軍みたいなものだがな」

「そういえば各地に仲間がいるって言ってたな……」

「それにしてもなんて数だ……とても小さい村を襲う数じゃないぞ」「ジェス。俺も手伝うよ」

「そうだな。お前の仲間が回復するまでは手伝ってもらおうとするか……だが戦えるのか？」

「それなら……大丈夫さ」

カインの顔はどこか決意を感じさせる表情だった。

「何があつたか知らんが期待しているぞ」

グールの部隊がついに村に入ってきた。入り口で陣形を組むスナイ村の人々は弓で応戦しているがすぐに破られるのは目に見えていた。スナイ村にいるシャインテラス解放軍のメンバーは三百人弱。対するグールの部隊は五千はいた。

「ふん……反乱軍といってもやり方はキングルドと同じらしいな」
「もう……誰も殺させはしない……」

カインの脳裏には幼い頃に見た光景が思い出されていた。

「行くぞジェス！」
「当然。この村は俺が守る」

二人は一気に敵に突っ込んでいった。

「おお……ジェスさんが来てくれたぞ！」
「みんな頑張るんだ！俺とこいつが相手するから援護を頼む！」
「了解！」

解放軍の全員が弓から槍に持ち替えた。

「いくぞ！」
「手はあるのか？」
「ある。相手は五千人以上いるんだ……それを逆手にとる！」
「どうするんだ？」
「食料庫を襲う。そうすればやつらはルワーノまで撤退するしかないだろう」
「それじゃこの村の食料が襲われるんじゃないか？それに増援物資があつたら……」

「どっちも問題ない。この村の人口は五百人。例えとられたとして

「お……おい！見る！食料庫が燃えているぞ！」

「まずいな……」

「どうしますか隊長？」

「ふむ……撤退だ！」

「全員退避！」

数時間後、ルワーノ反乱軍はすべて撤退していた。

「ジェス……どう思う？」

「そうだな。随分とあっさり引き上げたところを見ると、今回は脅しのつもりだったのかもしれないな。出来れば落とそうという程度だったのかもしれない」

「そのためだけにあの大群をよこしたと言っのか？」

「まあ全ては憶測にすぎないさ。今日はもう休め」

「そうだな……明日出発するよ」

そのままカインは休むことにした。その夜……。

「カイン……か」

ジェスは自室で難しい顔をしていた。

次の日の朝。

「うう……ん」

メイが目を覚ますと、右手と左手に温かいものを感じた。

「カイン様……じいちゃん……」

そこには心配そうに眠るカインとじいやがいた。どうやらまだ早朝のようだ。

「ずっとそばにいてくれたんですね……」

カインとじいやの顔を見てうれしくなった。そしてこの場にいはいバイスを思いさびしくもあつた。

「起きたか？」

ジェスがコーヒーを持って入ってきた。

「ジェスさんが助けてくれたんですね？」

「そういうことになるな。コーヒーだ」

「ありがとうございます」

二人の手を離してコーヒーを受け取った。

「むにゃ……」

「んー……」

「起こしちゃいましたね」

カインとじいやが眠そうに起きた。

「メイ……ちゃんと回復したんじやのう」

「良かった……」

じいやにとっては娘。カインにとっては姉のような母のような存在のようだ。

「お前達もコーヒーいるか？」

「いたどころかの」

「いただきます」

それぞれにコーヒーを注いだ。

「それじゃ俺は狩の支度があるからもう行くぞ」

そういつとジェスは自分の部屋に帰っていった。

「それじゃ俺たちもそろそろいこつか？」

「そうじゃのう。メイ、調子はどうじゃ？」

「ばっちりです」

カインは少し晴れた気分でした。

「カイン様何かいいことでもあつたんですか？」

少しでもこの村の為に役にたてたからだ。

「なんでもないよ」

そついいながらもその顔は少しはにかんでいる。

「昨日のカイン様はかつこよかったんですぞ？」

じいやの顔も笑っている。

「えー……見たかったなあ」

メイの顔だけが少し膨れていた。

第十一章

バシャバシャバシャバシャ。

「うはー！気持ちいいなあ。ガルフもどうだ？」

行水をするリック。

「俺はいいよ。いつ敵に会うかわからないからな」

そついいながら剣を磨いていた。昔使っていた自分の剣はさびて使えなかったので途中の町で買ったのだ。

「ガルフ……ずっとその剣を磨いてるな？あの店の女の子に惚れたか？」

店の女の子とは剣を買った店の娘だ。かなり可愛かった。

「……………っ」

ガルフの剣を磨くリズムが早くなった。

「凶星か……………」

リックはにやりとするとガルフに水をかけた。

「何するんだよ！」

「いや何……暑そうだったからな」

相変わらずニヤニヤしている。

「ほら！ もう行くぞ！」

剣を鞘に戻すと足早に歩き出した。裸のリックを置いて。

「おい！ 着替えるまで待ってくれよー」

……俺が人を好きになる？……

「まさかな……」

「待って言うてるだろ？」

「早くし……」

振り向くといまだに真っ裸のリックが堂々と立っていた。

「はあ……はあ……とりあえず着替えさせて……」

「一分で着替えてくれ」

……一分後。

「よーし！ 出発だ！」

いつもの格好にもどったリックと共にロブンテロに向かった。リイという名の人物と会うために。

「ところでリック、後どれくらいでそのロブンテロにつくんだ？」

「そうだなあ……一日もあればつくとは思うが……」

リックは地図を片手に難しい顔をしている。

「リック……それ逆じゃないか？」

「そういわれてみればそんな気がしないでもない」

見事に逆に持っていた。

「ガルフ……君に大事なことを言い忘れていたよ」

神妙な面持ちでリックは切り出した。

「僕は地図が読めない」

「そんなことだと思ってたよ」

ガルフは呆れ顔で地図を手を取った。

「とは言っても俺もこの状況じゃわからないな」

二人は目印の何もない森の中にいるのだ。

「誰か分かる人が通ってくれたら助かるんだけどな」

リックがつぶやいた瞬間少し遠くで物音がした。

「シッ。誰がいる……」

ガルフは少しずつ足音を殺してそこに近づいていく。

「……誰……か……いる……のか……」

かすれた声がある。

「誰か倒れてるみたいだ」

「リック、手当てをしよう」

二人は倒れている人物の手当てをした。

「ほら、水だ」

リックは先程の川で汲んだ水を与えた。

「げほっ……ありがとう」

「お前どうしたんだその怪我は……」

ガルフは左目に眼帯をしている全身傷だらけの男を心配した。

「ジェイクという男と少しやりあいましたね……」

「ジェイク……」

「リック知ってるのか？」

「ええ……確かルワーノ軍狼牙の若手ナンバーワンだった男がそんな名前だったはず……」

「あなたたちジェイクを知っているのですか？」

隻眼の男は少し身構える。

「まあ少しだけだ……そう身構えるな。俺はお前を襲うつもりはない」

「そうそう。僕たちは戦う意思はない。それに怪我に響くぞ？」

なおも警戒を解かない隻眼の男。

「少し訳アリでね……警戒するに越したことはないんですよ」
「それならこっちも訳アリだ」
「とりあえず礼は言っておきますよ」
「そうだ。あんたロブントロという場所を知らないか？」
「ロブントロ？ 知ってますが……」
「それは良かった。教えてくれないか？」
「ここから北に三時間ほど歩いたところにありますよ」
「なんだ結構近づいてたんだな。ガルフ、今日には着くぞ」
「そうだな。ありがとう助かったよ」
「一つ聞きます。あなたたちはルワーノ軍ですか？」

隻眼の男はマントの中で力を込める。

「ルワーノ軍……違うな」
「そうですか。それなら良い旅を……」
「ああ……」

ガルフとリックは隻眼の男に教えてもらった道を急いだ。

「なあリック。さっきの男只者じゃなかったな」
「ああ。かなり出来ると見た」
「それをあんなに深手を負わせるとは……そのジェイクはかなり強いのか？」
「僕もガルフとほとんどを地下牢で過ごしてるから詳しいことは良く分からないけど、狼牙のことは説明できるよ？」
「狼牙？」
「狼牙とはキングルド直属の部隊なんだ。強さは他の部隊とは桁違い。以前その若手ナンバーワンだったのがジェイクという男さ」
「ジェイクか……どこかで聞いた名前だな」
「今はその狼牙の隊長を務めているとか聞いたが……相当強いんだ」

ろくな」

「ほう……ん？ジェイク……思い出した」

「ガルフ知ってるの？」

「確か武道会の決勝で当たった相手だったかな……」

「そうか、当時からジェイクの強さはキングルドの次だと言われていたからな……当然誰もがジェイクが優勝すると思っっていたんだろうが……」

「当時十歳の俺が勝ってしまったからキングルドはあせって俺を監禁したんだな」

「みたいだね……ガルフも充分すぎるほど強いな」

「ここ数年の地下牢暮らしですっかりなまってしまった可能性も否めないがな」

「今はあの薄暗い地下牢から出たんだからどんどん強くなるさ。ガルフはまだ十七歳なんだし。あ、ロブンテロが見えてきたぞ」

ロブンテロの入り口までやってき二人は啞然とした。

「これは酷いな……」

リックはその騒然とした雰囲気につぶやいた。

「一足遅かったようだな」

見渡す限り略奪された後で一杯だった。

「こうなれば一刻の猶予もないね」

「さっそくリリイについて聞いてまわろう」

二人は町の住人にリリイについて聞いてまわったが、手がかりは全くなかった。

「少し一休みしようかガルフ」
「ああ」

二人はレヴオと言う喫茶店に入った。

「しかしよく考えてみれば解放軍のリーダーの事なんだから外から来た僕たちに情報もらすわけないよな」

「ああ。手がかりはゼロだったな。まあこうやってリリイとか言う女のことを聞きまわっていればあるいはと思ったが……」

「ガルフ。どうやらビンゴらしい……」

ガルフとリックはその喫茶店の異様な雰囲気気がついた。

「リック。これはどう思う？」

「どうやらここは少なくとも関係があると見た」

二人は喫茶店の客に囲まれていた。

「お前達か。リリイさんを嗅ぎまわってる二人組みってのは」
「まあ間違いではないな。リリイはどこにいる？」

ガルフが客をにらみつける。

「素性の分からないやつに話す必要はないな」

「まあまあガルフ、説明が足りてないぞ？」

「そうか。俺はルワーノ反乱軍のリーダーのガルフだ。リリイに話があつてここまで来た」

「ルワーノ反乱軍だと？」

客たちがざわめき始めた。

「す、少し待っている……」

相変わらず客たちに囲まれたまま十分が過ぎた。

「リリイさんが会ってもいいそうだ。この場所へ向かえ」

男は二人に紙切れを渡した。

「ふん……邪魔したな」

二人は喫茶店を後にした。

「さて、ここにいればリリイに逢えるのかな？」

「さあな。俺達をはめる罠かもしれないぞ」

二人がやってきたのは町外れの今にも崩れそうな小屋の中だ。紙切れの指示ではここで待っているとリリイにあえると書いてあったのだ。

「お前達がリリイ様に会いたいという者たちか？」

突然ドアが開かれ帽子を目深に被ったヒゲを生やした男が現れた。

「ああそうだ。会わせてもらおう」

「……ついてこい」

ゴルフとリックはヒゲの男についていく。どんどん森の中に入っていた。

「ここだ。入れ」

二人が着いたところは洞窟の入り口だった。中に入ると屈強そうな男たちが数人いる。

「それでリリイはどこだ？」

リックはそれらしい人物がいないことに気がつきヒゲの男に聞いてみた。

「ここにいる」

ヒゲの男はそういうと帽子をヒゲを取った。

「なんだ。お前がリリイだったのか」

「ええ。直接見たかったし相手も油断するから」

「単刀直入に言おう。俺はルワーノ国で反乱を起こした軍のリーダーであるガルフだ」

「付き人のリックです」

「その軍のことは聞いてるわ。なんでもルワーノ本国を攻め落とすとか」

「ああ。紛れもなく俺の軍だ。そこで俺達と手を組まないか？」

「それは出来ない話ね。いくらあなたたちがキングルドに反抗する軍だとしても結局はルワーノの軍ですもの。あたしたちの目的はシヤインテラスを再構築することなの」

「そんなことは分かってるさ。そこで提案がある。協力してキングルドを倒した後、元シヤインテラス領はお前達解放軍に、ルワーノ領は俺達反乱軍がそれぞれ統治する」

「悪い話ではないわね……ただ、逆に怪しすぎるわね。そこまでし

てあなたたちルワーノ反乱軍にメリットがあるとは思えないんだけど」

「そんなことは百も承知だ。だがそれ以上にキングルドを倒したいんだ」

「確かあなたガルフという名前だったわね」

「ああそうだが？」

「確か七年前から失踪しているキングルドの息子の名前もガルフだったと思うけど？年齢はあなたと同じくらいで」

洞窟がざわめいた。

「確かに俺はキングルドの息子だ。だがだからこそ色々あるのさ」

「まあいいわ。結論を出すのに一日くれるかしら？今日はここで泊まっていきなさい」

「そうさせてもらうよ」

ガルフとリックは一日待つこととなった。

「なあリック……どうなると思う？」

「そうだなあ……反応はよかったね」

「この交渉が成功すれば一気に道は開けるな」

「成功することを祈って寝ようか」

「ああそうだな……おやすみリック」

「おやすみ……」

次の日の朝、二人は騒々しい音で目が覚めた。

「何事だ？」

「さあ？ 火事でもあったのかな？」

二人はリリイのいる洞窟の開けた場所までやってきた。

「どうしたんだリリイ」

リリイは難しい顔をしている。

「シャインテラス解放軍の拠点のリード村とスナイ村が何者かに襲われたわ」

「誰かわかっていないのか？」

「今情報収集中よ」

「リリイ様！ 状況報告を致します！」

「ええ、お願い」

「スナイ村の方はジェス様が撃退された模様。ただ、リード村の方は全滅です！」

「なんですって！ 一体誰がやったの？」

「相手はルワーノ反乱軍と名乗ったそうです！」

「なんだと！ その情報は本当なのか！」

リリイが反応する前にガルフが食って掛かる。

「間違いないそうです！」

「そんな馬鹿な……」

「ガルフ……こうなつた以上あなたを帰すわけにはいきません……」

リリイは静かに剣を抜く。

「ちょっとリリイさん待ってください！ これは何かの……」

リックは必死にリリイを止めようとする。

「黙れ！ やはりルワーノを信用してはいけなかった……二人とも無事には済まさない！」

「くっ……ガルフ！ ここは一旦退きましょう！」

「ああ。それがよさそうだな」

ガルフとリックは弾かれた様に出口へと向かった。途中数人立ちはだかったが全て当身で吹き飛ばした。

「逃がすなー！」

そんな声があちこちから聞こえてくる。やっとの思いで洞窟から出る二人。

「くそ！ 一体どういうことだ？」

「わからない……とりあえず僕たちは一回ルワーノに帰ろう」

「そうだな……グールを聞いたださないといけなくなったな」

「もう少し……もう少しで上手く行ったのに……」

「ガルフ。落ち込むのは全てやってからにしよう」

「そうだなリック……」

こうしてシャインテラス解放軍との協定は失敗に終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5801c/>

リアルジャスティス

2010年10月9日23時34分発行